

---

# ラブカクテルス その7 1

風 雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その71

### 【Nコード】

N5848E

### 【作者名】

風 雷人

### 【あらすじ】

今宵は混ざり会う絶妙さを楽しんでいただけるカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前はシンクロでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私はゆっくり声を出した。

バックに何もなしで人前で歌うのは初めてだったせいもあり、出だしの声の強弱を掴むのに様子を伺う必要があったからだ。

しかしそのお陰で丁度いいビブラートが生まれ、歌い出しはまずまずだと、自分でも感じられた。

そして最終選考の課題曲を私は歌い終えて、気持ちがすっきりと、楽になったのを感じた。

オーディションは見事に合格し、私は某レコード会社からデビューする事が決定した。

しかし、そんな事は聞いていなかった。

デュオだなんて。

どういう事だろうか？

私の歌唱力では物足りないとも言つのだろうか？

それとも見た目？

私は納得がいかなかったが、そんな事を友達に愚痴ると、自分の引き立て役にその子がいると思えばいいじゃんと軽く言われたが、その時にした返事ほど、それはすつきりした答えではなかった。

そして彼女と会う日がきた。

彼女とはレコード会社の会議室で顔を合わせる事となった。

どんな子だろうか？

やはり歌がうまいのだろうか？

私より？

そしてルックスも私より上なのだろうか？

私は何だか不安と、負けん気をガツチリ背負って、その顔合わせに挑む事になった。

広い、三十人は入れそうなその部屋の中を覗くと、その円を描いたテーブルの手前の方で背中をこちらに向け、手を足の上に置いて上半身をそのテーブルの上ならんと伏せたまま乗せている少女がいた。

顔はまだ見えないが、歳は私より下に思えた。

しかし彼女はこの業界は長いのだろうか？

緊張している私の方が何だか幼く感じる。

しかしそんなことはヨソに、その彼女の横に座っていた男の人が、マネージャーを担当すると言つて立ち上がり、礼儀正しく挨拶をしてきたので、私も反射的に深く頭を下げて、お願いしますと、ハキハキと元気良く答えたのが、普段からオーディションを意識してきた癖だと、何だか恥じた。

なぜなら彼女はそんな私の挨拶を聞こえていないかのように、身動き一つ見せなかったからだだった。

そしていつまでもそんな状態の彼女に、私はムツとしました。

なんなんだろう、コイツ。

私はそんな彼女の顔を見てやろうと、向かいの席に着こうとした瞬間、彼女はいきなりスクツと立ち上がり、よろしくと一言いい、また、テーブルの上に、まるで液体みたいにダラーンとなった。

まったく掴み処がないとはコイツのためにある言葉だろうと、私は目を丸くしてそう思うのだった。

マネージャーは、私に彼女の事を簡単に紹介してきた。

それによると、私が東地区のオーディションで代表になったように、彼女は西地区の代表。

つまりはオーディションに勝ち抜いた一人で、しかもその応募人数は私の受けてきたものよりも、ほぼ倍の人数だと聞き、驚かされた。そして、その話のせいかは判りたくないが、私に微かな震えが襲ってきているのが感じ取れて、無理矢理それを抑え込んだ。

彼女はそんな話中も体を動かす事なく、まるで寝ているように呼吸だけをしている。

私はある意味、この態度に関心し、私と殆ど変わらない経歴のわりに、このやる気の無さは、今日は具合が悪いのか、それとも少し頭がおかしいのか？

私は思わず首を傾げた。

その後は、マネージャーから二人のユニット名がまだ決まっていないう事と、デビュー曲のサンプルを各自持って帰って、少し感じを掴んで来てほしいと簡単にまとめられてのその場を締められて、そしてお開きとなった。

私は少し肩の力を抜き、何だかクタクタになった体を引きずって家に戻った。

曲は思ったよりもセミバラードに近いもので、私は拍子抜けした。

デビュー曲だと言うからには、もっとインパクトがあるのだろうと思っていたか

ら、やる気が湧いてくるまでにはなんだかんだ時間が係りそうだった。

私はその曲のイメージを頭に創る。

恋愛の歌、逢いたくても逢えない切なさがテーマか。

私は相手の表情や、愛しい仕草を頭に描き、少し震える口調で歌ってみた。

しかし、頭の隅にいる彼女の残像が何だか気を散らしてくるようで、納得のいく歌い方がなかなかまとまらなかつた。

そんな事で日は過ぎて、私達はいよいよスタジオに入る時を迎えたが、私の意気込みはまるで続オーディションのように、勝負する勢いだつた。

私よりもまた先に来ていた彼女は、随分汚れた熊のぬいぐるみを抱えて、ミキシングルームの椅子にちょこんと腰を掛けて、静かに、また動かずに何かをぼーっと見ていた。

私はおはようと挨拶してみたが、彼女からの返事はなかつた。

私は心の中でちえつと舌打ちをしたが、そのタイミングでマネージャーが合流してきて、軽い打ち合わせをした後に声合わせを始める事になった。

私は体が緊張し始めて、それが表に出ないようにと、背筋をギュッと引き締めた。

入りは、出だしからアカペラで同じ音から始めて、段々と高音と低音に別れながら、ベースのラインと、色付けのラインに別れていくソウルフル調を基調に、私は自分の歌唱力を全開にした。

しかし横で聴いた彼女の歌声は、私がイメージしていた以上に、何か強烈なものを感じさせる、オーラさえ漂うものだと、私は思い知らされることになり、危うく心を乱されるところだつた。

なんとかその歌声に、私は飲み込まれないように、必死に抵抗しようやく曲の終わりを迎えた。

私はぐつたりとなつたが、彼女はヒョウヒョウとした顔を私に向けて、一言いった。

へエー、うまいんだ。歌。

でも技術だけね。

私は頭に血が登った。

何様だ！お前は！

しかしそんな気持ちの私を後に、彼女は颯爽と振り返ると、また、ミキシングルームの椅子に戻って、その汚らしい熊のぬいぐるみを抱えた。

先制パンチを喰らったようだ。

私は怒りを覚えた。

そしてそれから何パターンかを、パートを入れ替えながらの歌い試しが行われ、あっという間に時間が経ったが、それがあまりに重い時間だったため、前回よりもキツイ帰宅の途となった。

そして彼女の、頭から離れない歌声は、夢にまでそれを響かせて、しかしながらそれに酔い知れている夢の中の自分に、私はうなされて飛び起きた。

言いようのない挫折感。そんなものが私の上に乗し掛っているのがわかった。

きっと目の下にクマが張っているに違いない顔で、私は次の日もスタジオ入りをし、もう後には退けない覚悟で挑むのだが、意外と辞めて諦めるのも簡単なのだらうと、いけない弱気を微かに持っている自分を押し殺した。

そしてその日、衝撃的な知らせをいきなり受けることとなった。

なんと親に承諾を受けてあるからと、この日から二人はマンションの同じ一室に同居する事になったのだった。

私はあまりの急な話しに驚き、どうしてとマネージャーに問正してみたが、当のマネージャーは、あれ？喜ぶと思っていたのにと、拍子抜けする有り様で、私はまだ受け入れるには到底難しい彼女を見た。

しかし彼女はよろしくと、あっさりそれを認めて、鼻歌を歌い出す始末だった。

疲れが取れない。

肩から力が抜けない。

何で私がこんな思いをしないといけないのだろう。

彼女はさっきから部屋の隅に例のクマを抱いたまま黙って座っている。

ここに来てから二人に会話はなかった。

しかし気まずい。

私がそう思っている矢先、彼女はいきなり口を開いたかと思うと、私人の心が読めるの。

と言ってきた。

私は突然の告白にドキツとしたが、そんな私の様子も見ずに彼女は、うそ。

と窓の外を見ながらボソツと呟くのだった。

私は顔が引き攣っているのがわかった。

なんなんだコイツ。

私は何だか頭にきて、大きめのクッションを抱いたままテレビを衝けて、見たくもないくだらない番組を見る振りをした。

彼女はイヤホンをして、体勢も変えずに何かの歌を聴いているようだった。

二人のチグハグな同居は容赦なく続き、そしてデビュー用の曲も割かし順調に仕上げを見せていたそんな中、マネージャーが突然、ユニットの名前が決まったと

興奮気味で二人に告げた。

ラグーン。

それが私達のユニット名。

私は何だかワクワクしたが、彼女の表情には、これと言った変化はあまり起きなかった。

こんなんで二人はやっていけるのだろうか？

私と彼女の溝はまだ埋まるどころか、先の見えない闇の様に深いままだ。



私は周りにはわからない程度の溜め息を吐き、そして彼女の冷めた目をなるべく見ないようにと、ワクワク感を維持してテンションを上げた。

私は深夜、何だか無性にお腹が空いて目が覚めた。

仕方なくコンビニに行き、簡単なサンドイッチなんかを選んでいると、持っていたそれをいきなり落としてしまった。

手が滑ったのではない。

体が動かなくなり、震え出したのだ。

歌のせいだ。

そこに掛けられていた曲は、なんと自分達の曲。

私は店を飛び出し、部屋に戻ると、布団に潜り込んで、震えが止まらない体を丸め、ニヤケが止まらない顔に、小さい声でヤツタ、ヤツタ、と繰り返し言った。

しかしそれでも我慢することができなくなって、布団から飛び上がり、思わず大声で叫んでしまった。

やったあーっ！

その声に当然彼女も目を覚まし、不思議そうな顔で私を見ていたのだ、私躊躇いもせずに彼女の手を取って踊り出してしまった。

彼女はそんな私に、訳もわからないのに微笑みを浮かべて、不器用に笑った。

その意外な彼女の仕草が何だか嬉しく思えて、こちらも訳がわからずに、目頭を熱くさせたのだった。

いよいよテレビに出演することになった。

新人として、私達は色々な質問を受けて、しかし殆どを私が話す結果となり、彼女はクマを抱いたまま、辺りをキョロキョロ見ているだけだった。

そして、眩しいセットの中に二人は立つことになり、私は不覚にも

震え出してしまった。

しかしそんな時、彼女は私の手を握ってきて言った。  
楽しんで歌う。それだけ。

そして笑った。

不思議と体から震えが止まり、私も笑顔で頷いていた。

二人の気迫は、スタジオ全体に響き渡った。

初めのパートを私は心から声を染み出させるように、感情を相手に同調させる歌い方で歌いきり、チラツと彼女見て、次は任せたから皆に聞かせてやりなと笑顔を向けた。

彼女はまるで、わかっているわよと言わんばかりの自信に満ちたウイソクをしながら、今までで一番やさしく心を震わす声を披露し、私までなんだか涙が出そうな歌を放った。

そしてサビはそんな二人の魂が重なり、ダイヤの輝きにも勝るハイモニーを織り成し、歌い切った満足感に感動を覚えた。

拍手と歓声がそんな二人を包んだ。

いや、二人ではなく、きつと一つだ。

私も彼女も歌い終わった時には、間違いなくいい顔をしていたに違いないかった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5848e/>

---

ラブカクテルス その71

2010年10月11日02時21分発行